人の心

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人の心

【Nコード】

N1901F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ふとしたことから山を降りて人間の娘の所に行こうと言い出した狐と狸。そのうちの一匹がその娘のところに行くと。ほのほのとしたお話です。

第一章

人の心

深い深い山の奥で。狐と狸達があれこれと話をしています。お酒に山の幸やら川の幸やらを飲み食いしながら楽しく話をしています。

「この前ここに来た人間じゃが」

「おお、あ奴か」

「そう、あ奴じゃ」

狐と狸達は酒を飲んで魚や山葡萄を食べつつ人間の話に入りました。

「あ奴がのう。何か最近遠くに行っておるそうじゃ」

「遠くに？」

「そうじゃ」

狐のうちの一匹の言葉に狸のうちの一匹が応えます。

「何でもそこにいい木があるそうだな。その枝を取りにな」

「枝なぞそこいらにないか？」

「そうじゃそうじゃ」

狸達はその狸の言葉を聞いてそれぞれの口で言つのでした。

「何でそれで遠くに行く必要があるのじゃ」

「人間もわからんことをするのう」

「何でもな」

その狸が狐達に答えます。

「その木の枝は売れる値段が違うそうじゃ」

「違うのか」

「全然違うそうじゃぞ」

狸は酒を一杯飲みそれから鮎を口に入れて述べます。見れば狐と狸達はそれぞれあぐらをかいて車座になり狐も狸も混ざって楽しく飲み食いしています。周りには木々がありその中で実に賑やかな様子です。

「それで行っておるそうじゃ」

「人間の世界もわからんのう」

「全くじゃ」

狐達は腕を組んで述べます。

「木なぞどれも同じにしか思えんがのう」

「違うのは食い物位じゃろ？」

狐達もまたお酒や魚を食べています。鮎やうぐいを実に美味しく口にに入れて噛んでそれから飲み込んでいます。堪能といつてもいい姿です。

「結局のところは」

「それがどうしてじゃ」

「人間のことはわしにもわからんよ」
話をしたその狸が述べます。

「人間の世界はわし等とは全然違うからのう」

「その通りじゃ」

「全くじゃ」

彼の言葉に他の狸達も頷きます。やはり彼等も楽しげな様子です。

「金はそんなに重要かのう」

「酒も食い物も好きなだけ手に入るののう」

「全くじゃ」

彼等にすればそうなのです。だから人間達がどうしてそんなにお金が必要になつていゝるのかもよくわかつていないのです。彼等が話すその人間にしろどうしてそんなにお金が欲しいのかもわからないのです。彼等にとっては考えてもどうしてもわからないことなものでした。

その中で。若い狐がふと言いました。忠信狐といます。

「その人間じゃがな」

「うむ。どうした？」

「何でそんなに金がいるのじゃ？」

このことを皆に尋ねるのでした。

「人の世界で金が必要なのはわかった」
「うむ」

「生きる為に必要らしいな」

「まあそうじゃな」

「そうでない奴もたまにいるようじゃがな」

「狐達だけでなく狸達も応えます。」

「実際のところは」

「たまにじゃがな」

「しかしその人間は違つうのじゃ。随分といるそうじゃ」

「随分とか」

忠信はそれを聞いて前足を人間の腕のようにして組みました。そのうえで考えだしたのです。これまたかなり人間臭い格好であります。

「そう、随分とじゃ」

「随分とか。やはり何かあるのか」

「子供がおる」

子供のことは狸のうちの二匹から出ました。

「子供がのう。それでなのじゃ」

「子供がおつたら金が余計にいるのか」

「人間の世界ではそうらしいの」

「ふむ、わからんのか」

忠信はさらに考え込むことになりました。人間はどうして子供ができたらお金がもつと必要なのか。それがわからないのでした。

「子供がおつたら金が余計に必要なのか、人間は」

「意味がわからんじゃろ」

「うむ」

また仲間達や狸達の言葉に答えます。

「全く以つてな。謎じゃ」

「そうじゃろ。全く筋がわからん」

「何が何なのかな」

狐達も狸達も人間の世の中のこうしたところがどうしてもわからないのでした。人間臭い仕草で人間が食べるのと同じものを食べられないのでした。幾ら考えても考えてもです。それだけはどうしてもわかりません。人間ではないのでそうしたところはわかりかねているのです。

「人間はのう。全く」

「わからんな」

「しかしじゃ」

忠信はここで言うのでした。

「面白そうじゃな」

「面白いのは確かじゃな」

「人間もあれはあれで面白いぞ」

狐達と狸達もそれは大いに認めるのでした。

「見ておればな」

「話していてもな」

「そうか」

忠信はそれを聞いてまた考える顔になりました。そのうえでまた言うのです。

第二章

「では少し見てみるか」

「見てみる？」

「うむ」

仲間達に対して答えます。

「どうじゃろ。それは」

「人間の世界にか」

「例えば。その遠くまで木を取りに行っている人間じゃが」

「あ奴か」

「そ奴には子がおるのじゃろ？」

「このこともまた仲間達に尋ねるのでした。」

「今の話では」

「女の子が一人おるぞ」

「女の子がか」

「女房を亡くしてな。今は男やもめじゃ」

「娘が寂しいじゃろうなあ」

忠信はそれを聞いてまた腕を組みました。そのうえでまた述べます。

「おとつつあんが家を離れることが多いのではな」

「村の者が優しくしてくれることはしてくれぬがな」

「この言葉がかけられました。」

「一応はな」

「そうか」

「そうじゃ、だから寂しくはないようじゃ」

「しかしあれじゃろ？」

忠信はまた仲間達にも狸達にも尋ねます。

「家で寝る時はいつも一人じゃろ」

「まあそうじゃな」

「おとつつあんはいつも遠くに木を取りに行っておるからな」

「自然とそうなるわ」

狸の一匹が答えました。

「父親一人娘一人じゃからな」

「それを考えると不憫じゃな」

忠信はその娘のことを思い心が少し哀しくなったのが自分でもわかりました。

「そうじゃな、やはり」

「何か考え付いたみたいじゃな」

「うむ」

その狸の質問に答えます。

「ちよつとその村に行つて来るわ」

「村にか」

「そうじゃ。別にいいじゃろ？」

「わし等は別にのう」

「反対する理由もない」

狐達も狸達もこう答えたのでした。

「好きにするといい」

「御主の好きなようにな」

「そうか。なら行つてみる」

皆からも言われて決意を固いものにした忠信でした。顔にもそれがはつきりと出ています。

「その娘の家にな」

「まあやつてみよ」

「ただし狐とばれぬようにな」

「ここは釘を刺されました。

「ばれたらそれこそじゃ」

「袋叩きにされてしまつぞ」

このことはよく注意されます。何しろ狐に狸といえは皆人を化かすものだと思つているからです。それで化けていることがばれれば

それこそ村人達から袋叩きです。狐や狸達の中には実際にお地蔵様や小僧に化けてお菓子や揚げをくすねようとしたのがばれて殴られたのもいるのです。だからこのことは実経験としてわかっているのです。

「そこは注意しろよ」

「連中そういう時は本当に容赦せんからな」

「ははは、わかっとなるわかっとなる」

忠信は酒を飲みながら皆に答えます。

「そこはな。では明日行くな」

「うむ、ではな」

「行って来い」

こうして忠信は仲間にも声をかけられそのうえで村に向かうのです。山を越え村の入り口のところで、仲間達から聞いた父親の姿そのままに化けるのです。

「これでよいかのう」

側にあつた水溜りを覗いて顔を確認めます。自分では中々のものだと思えます。

「いけるかの。さてと」

顔を上げて村に入りました。背中に薪を背負うのも忘れません。

何処からどう見ても純粹な樵です。斧とか鋸なんかも持っています。その格好で村に入ると。早速村人のうちの何人かが彼に声をかけてきました。

「おう与平さん」

「早いな、案外」

こう彼に声をかけてくるのです。

「今日もたっぷり取ってきたな」

「ちよちゃん喜ぶぞ」

「ちよちゃん？ああ」

それが誰の名前かすぐにわかりました。娘の名前です。ついでに言えば今彼が化けている父親の名前までわかったのです。

「娘ですかい」

「そうじゃ、もう待っておるぞ」

「家でな」

「家か」

見れば村の奥に一軒の家があります。そこに向かうと家の前に赤い服を着た一人の女の子がいました。髪を上で結って黒い大きな目をしていきます。どうやらあの娘がちよなのだとわかったのです。

第三章

「ほれ、もう待っておるわ」

「行くといい」

「わかった」

彼等の言葉に頷きながら家に向かいます。家の前まで来ると。そのちよが顔を上げて彼に声をかけるのでした。その明るい声で。

「おとう、おかえり」

「ああ、只今」

忠信は与平になってちよに応えるのでした。

「今日帰ってきたんだね」

「ああ」

演技を上手い具合に彼女に合わせるのでした。このことに少し戸惑ったりもしましたがそれは表には出さずに済みました。

「もう薪がたつぷりと手に入ったからな」

「そうね、今日も凄いな」

ちよは与平の薪を見て少しだけ彼の目を見た後で笑顔になるのでした。彼が実は狐の忠信であることなぞ全く知らずに。その薪を見て子供らしく無邪気に笑っています。

「これ売ったらかなりのお金になるね」

「ああ、お金が」

「そう、お金になるよ」

やはり彼のことには気付かず話すのでした。

「おとうのおかげであたしもこうして暮らせるんだ。有り難うね」

「いやいや、御礼なんていいさ」

忠信は笑ってちよに答えます。

「それよりだ。寂しくないかい？」

「寂しい？」

「そうだよ。ずっと一人だったろ」

「こつ彼女に尋ねるのでした。

「だから。寂しくはないのかい？」

「ううん」

けれどちよはその言葉に笑顔で首を横に振るのでした。

「別に。何も無いよ」

「寂しくないのか」

「だって。おとうが帰って来たから」

笑顔のまま彼に答えます。

「寂しくなんか無いよ」

「そうか、いい娘だね」

忠信はちよの今の言葉を聞いておとうに化けているのをついつい忘れてしまいました。それでおとうにしては少し不自然な言葉を口にしてしまいました。

「ちよちゃんは」

「！？おとう」

ちよは今のおとう、つまり忠信の言葉に目をしばたかせました。

そのうえで彼に問うのでした。

「何かあったの？」

「何かあって？」

「今日のおとう、何か変だよ」

「そ、そうかのう」

気付かれてしまったのかと思って慌てました。身振り手振りにそれが出てしまっています。

「別に変わらんが」

「一緒なの？」

「わしはわしじゃ」

動揺を隠しながらちよに答えます。

「それ以外の何者でもないぞ」

「そつなの」

「そつじゃ」

まだ言い繕います。

「何ともない、本当にな」

「そうなの」

「おとうはおとうじゃ」

「こつも言います。」

「ちよのおとうじゃ。それ以外の何じゃというのじゃ」

「何でもないけれど」

「そうじゃろう。それではじゃ」

「ここで話を変えるのでした。」

「今日の飯は何じゃ」

「お粥だよ」

笑顔でこう答えてきました。

「お米に稗と粟を入れたお粥だよ、それでいいよね」

「うむ、よいよい」

ちよがもう御飯を作っていることを聞いてまたしても感心するの
でした。忠信は話を聞いていてちよが思っていた以上にいい娘だと
わかってとても嬉しいのでした。

「では一緒に食べよう」

「うん、それでねおとう」

家に入ろうとする彼にまた声をかけてきます。

「今日面白いことがあったんだよ」

「面白いこと？」

「そつだよ。お隣のさくちゃんがね」

「ああ、さくちゃんか」

そんな話をしながら中に入ります。そうしてその御粥を食べなが
らちよの話をさらに聞いていて。それが一段落ついでからちよに尋
ねるのでした。

「なあちよ」

「何？」

「御前、寂しくないのかい？」

「こつ尋ねるのです。御粥を食べながら。」

「寂しいって？」

「だからおつかあいないだろ」

「うん」

「そしてわしだつてだ」

「ここでは上手くおつとうになることができませんでした。」

「あまり家におらんじやろ」

「そうだね」

「それでいつも家には御前一人じゃ」

「氣遣うような声で彼女に問い掛けています。」

「この家に御前一人で。寂しくはないのかい？」

「それはね」

「ちよはそれに応えてきました。」

第四章

「あまりって言ったらやつぱり」

「言っていいぞ」

優しい声をちよにかけます。

「何でもな。言っていいぞ」

「いいの？」

「ああ、いいさ」

笑顔さえ見せてみせます。人の笑顔を必死に真似して優しいものにしていきます。

「だから言ってみる。好きなことをな」

「やつぱり。あたしだって寂しいよ」

やっと、といった感じで少し俯いて。小さな声での言葉でした。

「家に一人でいる時はね」

「そうか。やつぱり」

「それでも。寂しくないよ」

けれどここで顔を上げて。こう言ったのです。

「それでもね」

「けれど今寂しいと言ったじゃないか」

「それでもだよ」

強い声での返事でした。それは決して強がりではありませんでした。

「だって。おつとうはいつもあたしの為に働いてくれているんだよね」

「あ、ああ」

まさかそのおつとうに化けているとも言えずこう答えるのです。

「それはそうだが」

「だったら寂しくないよ」

今度は笑顔にさえなっています。

「それだけであたしはいいの」

「いいって？」

「おっとうの気持ちがわかるから」

だからだというのでした。

「その気持ちがあれば。もう寂しくなんかないよ」

「それだけでか」

「だっておっとうはあたしの為に樵をやってるんじゃないか」

人間はどうして働くのか。忠信はその理由を今聞きました。それは決して自分だけの為ではないのでした。他の人の為でもあったのです。

「だからさ。その気持ちでもう」

「そうか、寂しくないか」

「だから。心配しなくていいよ」

また笑顔で忠信が化けている忠信に答えるのでした。

「それでね。大丈夫だから」

「そうか」

「そうだよ。あとさ」

「んっ!？」

「柿あるんだけど」

不意に柿の話を出してきました。

「お隣の爺ちゃんから貰ったんだ」

「柿をか」

「おっとう好きだよね」

「その通りじゃ」

柿と聞いて化けるのとは別に笑顔になっていました。実は忠信は柿が好物なのです。柿と聞いて思わず涎が出る程でした。

「そうか、柿か」

「一緒に食べよ」

こう彼に言ってきます。

「二人でね。どうかね」

「うむ、食べよう食べよう」

明るい声でちよに述べます。

「柿をな。二人で」

「じゃあ。ほら」

後ろからその柿を出してきました。大きくて少し固そう。見るからにとても美味しそう。その柿を見て忠信はまた涎が出そうになりました。

「これはまた実に」

「どうぞ、美味しそうでしょ」

「ああ」

ちよの問いもよそに答えます。

「これ程の柿は。山にもそうそう」

「ないんだ」

「ないない」

首を横に振って述べます。

「さあ、食べるのがはじめてじゃ」

「じゃああたしも一個ね」

「二個じゃから半分じゃな」

「そうだね。じゃあ半分と半分で」

「うむ」

「食べよう」

「半分こか」

忠信は早速その柿を受け取りむしゃぶりつきます。その中でちよの今の言葉を心の中に反芻するのです。口の中に柿の甘さとほのかな渋さがあります。

「そうやって食べているんじゃない」

「うちじゃいつもそうじゃない」

呟くと早速ちよに突っ込まれました。

「半分半分で」

「そうじゃったか」

「そうじゃったかっておとう」

苦笑いになつて彼に言つてきます。

「おとうが決めたじゃない、これって」

「おお、忘れておつたわ」

慌ててこつ芝居をしました。

「済まん済まん」

「しつかりしてよ。本当に今日おかしいよ」

「だからそれは気のせいじゃて」

「だったらいいけれど」

「しかしのう」

柿を食べながら目を細めさせて述べるのです。

「親と子供で半分か」

「うん、そうじゃない」

「我ながらじゃ」

何とか上手く芝居ができました。

「いいことを思いついたわい」

「そうなの」

「ちよは幸せじゃの」

その細めさせたままの目でちよに述べたのです。

第五章

「こうして親子で半分ずつ仲良く食べられて」

「だから寂しくないんだよ」

「だからか」

「おっとうのその気持ちがあるから」

見ればちよもまた。目を細めさせてそのとても甘い柿を食べながら忠信に答えていました。やはり忠信と同じ柿を口の中に入れながら。

「寂しくないんだよ」

「ふむふむ」

その言葉を聞いてしきりに頷く忠信でした。

「左様か」

「そうだよ。じゃあこれを食べ終わったらね」

「うむ」

「寝よう」

楽しく笑ってまたおっとうに言ってきました。

「お布団敷くから」

「布団かあ」

「二つだよ」

「いつもはやっぱり一つじゃよな」

「まあね」

忠信の問いに少し寂しげな顔になっていました。

「けれど今は違うから」

「わしがおるからか」

「だから。早く寝よう」

また忠信に言ってきました。

「お布団の中でも。色々とお話しようね」

「いやいや、少し待つんじゃない」

「んっ!?!どうしたの?」

「歯は磨いたかのう」

このことをちよに尋ねる忠信でした。ここではおとうになった言葉でした。

「ちゃんと磨いておかないと虫歯になるぞ」

「あっ、そうだったね」

言われてそのことに気付くちよでした。

「それ忘れたらやっぱり」

「今はよくても後が怖いぞ」

優しく笑いながら伝えるその顔もおとうのものになっていました。

「じゃから。そこはしっかりとな」

「うん、わかったよ」

「それからじゃ。寝るのは」

「また伝える忠信でした。」

「よいな」

「うん」

こうして歯を磨いてから仲良く寝た忠信とちよ。並んで敷かれたお布団の中にそれぞれ寝て楽しくお話してから寝ました。朝になつて朝御飯を食べて家を出る時に。家の扉を開けて山に行こうという姿勢を見せている彼に対してちよが後ろから声をかけてきました。

「ねえ」

「んっ!?!」

「もう行くんだよね」

「こう忠信に声をかけてきています。」

「もう山に行くんだよね」

「ああ、そうじゃ」

その問いに笑いながら答える忠信でした。まだおとうのつもりです。

「それがどうかしたか?」

「行ってらっしゃい」

笑顔で言うちよでした。

「頑張ってるね」

「うむ」

「それでね」

「ここでちよは。ふとしたように忠信に言うのでした。

「また来てね」

「！？それは一体」

「おとうじゃないでしょ」

「そしてこう彼に言うてきました。

「おとうはまだ山で薪取ってるよね」

「いや、それは」

「わかるよ」

何か言おうとする忠信の機先を制するようにしてまた言うのでした。

「だって。あたしおとうの娘だよ」

「おとうの娘」

「狐さんの娘じゃないもの」

「何故わかったのじゃ」

「迂闊にも自分からばらしてしまった忠信でした。

「何故わしが狐じゃとわかったのじゃ？」

「目よ」

「目か」

「そう、目」

「目のことを指摘するちよでした。

「目でわかるのよ」

「わしの目でか」

「おとうの目は垂れてるのよ」

「むむっ」

「けれど狐さんの目は吊り上がってるからね」

「わかるというのか」

今はじめて気付いたことでした。狐の目が吊り上がっているのは誰でも知っていることです。忠信は化ける時にそれをつっかりと消し忘れていたのです。

第六章

「だからわかったんだよ」

「しまったのう」

「けれど。悪い狐さんじゃないよね」

「ちよはまた笑って忠信に言ってきました」

「狐さん。悪い狐さんじゃないよね、だからいいのよ」

「わしは悪い狐ではないとわかるのか」

「だって。目でわかるから」

「また目が」

ここでまた目のことを言われてその吊り目を大きく見開くのでした。細い目がかなり大きく見えました。

「わしの目が」

「そう、目でわかるのよ」

「ちよはまだ忠信の目を見えています。そうして言うのです」

「何でもね。目って凄い色々なこと言うから」

「ううむ、そうじゃったか」

「だからいいの」

「また言います」

「最初は何だって思ったけれどね」

「まああれじゃ」

「正体がばれてそれで照れ臭そうにちよに告げます。顔も彼女から

離して実に申し訳なさそうです」

「悪気はないのは事実でな」

「それはわかっているからいいよ」

「左様か」

「楽しかったよ」

最後に忠信に言うのでした。

「狐さん、有り難うね」

「礼を言われるとなあ」

さらに照れ臭い顔になるのです。何しろそこまで考えてやったわけではないですから。ただちよが寂しいだろうと思って彼女のところに来たわけで。それで御礼を言われてでしたから。

「いいのよ、あたしは感謝してるから」

「そうか」

「だからいいの。有り難うね」

「わかった。それではな」

やっとちよの言葉に頷くことができました。

「その言葉受けさせてもらっぞ」

「うん、そうしてくれるとあたしも嬉しいよ」

「それではな」

「うん、本当に有り難うね」

最後はお互い笑顔で手を振り合って別れるのです。それが終わってから山に帰って仲間達に話をする。誰もが笑顔で言うのです。

「それは何よりじゃのう」

「いい娘じゃ」

「わしが狐だとわかっておったのじゃよ」

また皆車座になって胡坐をかきつつお酒や山や川の幸を食べつつ話をしています。

「賢い娘じゃて」

「賢いだけじゃないな」

「その通りじゃ」

狐達も狸達もそれぞれ言います。

「また随分と優しい娘じゃ」

「いい娘じゃ」

「それでじゃ」

ここで忠信は言うのです。

「わしは考えておるのじゃがな」

「どうした？」

「今度は皆で行かんか」

「皆でか」

「そうじゃ」

また言う忠信でした。

「それでどうじゃ？今度は皆であの娘を楽しませてやるつもり
じゃが」

「ふむ。そうじゃな」

「それもいいのう」

「じゃあ賛成じゃな」

「うむ」

皆彼の言葉にあらためて頷くのでした。これで決まりでした。

「いいことじゃと思つぞ」

「一匹で行くより皆じゃ」

「それにじゃ」

皆口々に楽しく話を続けます。

「ただ行くのも面白くないじゃろ」

「左様左様」

「というと」

皆が楽しそうに話すのを見て尋ねる忠信でした。

「どうするのじゃ？」

「決まっておるじゃろう」

「決まっておる！？何がじゃ」

「おみやげじゃよ。おみやげを持って行くのじゃよ」

「ああ、それが」

言われてやっと気付くのが少し迂闊な忠信でした。

「それじゃったか」

「そうじゃよ、それでよいな」

「何でも持っていけるぞ」

山に住んでいる彼等にとつては何かを見つけたことは別にどうつと

いうこともないことなのです。何しろ今彼等が食べているお魚にする葡萄にする柿にする全部そうなのですから。だから特にどうということはないのです。

「そういうことじゃ。それではな」

「皆で何か持って行ってな」

「あの娘を喜ばせようぞ」

「そうじゃな。それではわしも」

忠信もその話に乗るのです。こうして今皆で立って。

「そうと決まれば話が早いぞ」

「皆で。あの娘を楽しませてやるうぞ」

こう言い合い今ちよのところに向かうのです。一人の女の子を喜ばせる為に。ただその為に行くのです。

人の心 完

2008・9・1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1901f/>

人の心

2010年10月8日15時04分発行